諫早市総合教育会議議事録

平成３０年度　第１回

平成３０年度 第１回諫早市総合教育会議

１　日　時　　平成３０年１２月２１日（金）　１６時００分～１７時００分

２　場　所　　諫早市役所　８階　会議室８－１

３　出席者　　市　　長　　宮本　明雄
　　教　育　長　　西村　暢彦
　　教育委員　　緒方　正親
　　教育委員　　秀島　はるみ
　　教育委員　　大石　竜基
　　教育委員　　宮本　峻光

４　会議に出席した職員
　　政策振興部長　　竹市　保彦
　　教育次長　　井上　良二
　　教育総務課長　　田島　正孝
　　学校教育課長　　福元　英典
　　生涯学習課長　　藤山　誠治

５　傍聴者　　０名

６　議　題　　（１）教育大綱について
　　（２）意見交換
　　テーマ「ふるさと学習について」
　　～ふるさと諫早の将来に夢や志を持つ教育～

○　教育総務課課長補佐

それでは、定刻になりましたので、ただいまより平成３０年度第１回諫早市総合教育会議を開催したいと思います。本会議議事進行につきましては、西村教育長にお願いしたいと思っております。

○　教育長

はい。では始めさせていただきます。最初に市長からご挨拶をお願いします。

○　市長

みなさん、こんにちは。お忙しいところにご出席を賜りまして誠にありがとうございます。

教育行政については、皆様方のお陰で順調に推移をしているものと思っております。今年の夏は特に暑かったということもありまして、大きな事案が起こらなかったからよろしいんですけれども、全国でも、１１月の初めの補正予算でエアコンについての特例措置というものが設けられました。エアコンにつきましては、設備とか施設の改修の予算と同じ費目になっていると思いますが、エアコンについての予算を特別に計上しているわけではこれまではありませんでした。今回は、エアコンとブロック塀に限って予算措置がなされまして、通常の予算より手厚い支援になってます。長崎県は特にエアコンの設置率が低かったというのもあるんですけれども、長崎県ではほぼ全小中学校に入っているのが、島原市と南島原市の一部であります。これは、雲仙普賢岳の関係がありまして、その時に設置され、２０数年経っているということになります。

今回、私どものほうも、１１月の初めに臨時議会を久しぶりに開催し、エアコンの設計のための予算を計上させていただきました。この特例措置というのは、今年度いっぱいの措置になります。ですから、３月の補正に間に合うようにとのことで、それまでに設計を終えないといけないということもありまして、１１月９日に臨時議会の開催をさせていただいて、予算を措置いただきました。まだ金額は明確にはわかりませんけれども、３月の補正予算で全体の予算を組むことになります。

ただ、全国でエアコンの需要が急に高まってまいります。ですから、機械が入ってくるのがいつになるかというのはまだ定かではございません。文部科学省からも経済産業省からも業界に対しては増産のお願いというのをされていると伺っておりますけれども、実際に製造をしているところが、３メーカーぐらいしかないそうです。販売しているところはもっとあるそうですけれども、製

造は３企業ぐらいが製造をされている。特に、業務用のエアコンということになりまして、２００Ｖの通常の家庭用とは違いますので、そういう意味で需要が急に出てくるということでございますので、入り次第設置ができるような形にしたいと思っております。配線工事などを発注して、機器類が入り次第設置をするような形が一番早いのかなと、これは教育委員会のほうで検討をしていただいているものと思っております。

学校給食のときもそうだったんですけれども、中学生の学校給食を完全給食にするかしないかというのを随分論議がありました。今回、エアコンについては、豊田市の事案というのが発生をし、全国的に話題になった関係もあって、特に今年の夏が、災害に値するような猛暑であったということもありまして、急遽取り組むことにしているところがほとんどだと思っております。ちょっと危惧をしてますのが、エアコンを設置して、これまでは昼休み等は運動場で遊んでいたのが、教室が涼しいと涼しいところに行ってしまうのではなかろうかと。教育上支障がないようにぜひ論議をしていただいて、各学校の指導をしていただきたいと思っております。家庭もそうですけれども、エアコンが入りますと、なかなかトイレにも行きたくないというような感じがあって、廊下にはエアコンは入らないとなると思いますので、その辺の取扱の要領については、一定の論議をしたうえでエアコンを使用していただきたいと私は思っております。その辺の論議は、宮本教育委員も医師でございますので、そういう意味でのアドバイス等をいただいて、各学校に基本的な考え方というものは伝えた方がいいのではないかと思っておりますので、ぜひ、ご検討賜ればと思います。

本日は、「教育大綱について」ということ、それから「ふるさと学習について」ということでございます。この副読本「私たちの諫早市」「のびゆく諫早市」が発行されておりますけれども、これを久しぶりに読むと知らないことも結構あります。私はずっと諫早市に住んでいますが、それでも知らないことがありますので、１回は習ったことがあると思いますけれども、そういう意味では、改めて、諫早の歴史を知る、諫早の成り立ちを知るというのは重要なことではないかと思っております。

皆様方の日頃の教育行政に対するご支援、そして、また、市政に対するご支援ご協力に感謝を申し上げまして、開会にあたりましてのご挨拶にさせていただきます。ありがとうございました。

○　**教育長**

ありがとうございました。エアコンにつきましては、マニュアル等、使用上

の留意点等は考えるつもりでおりますし、教育委員さん方にも一緒に検討していただければと思っております。場合によっては、また一緒にご相談して、このように総合教育会議でも取り上げてもいいのかもしれません。流れの中で考えていきたいと思います。よろしくお願いいたします。では、まず一番目教育大綱について進めたいと思います。教育次長の方から説明をお願いします。

○　教育次長

教育大綱について、ご説明いたします。まず、教育大綱がどういったものかというところを改めてご説明いたします。

教育大綱は、平成２６年に改正された地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づき、新たに定めることとなったものでございます。市長が地域の実情に応じ、市の教育、学術及び文化振興に関する総合的な施策について、その目標や根本となる方針を定めるものであり、詳細な施策について策定することを求めているものではございません。

お手元の資料１諫早市教育大綱をご覧ください。１ページでございます。１教育大綱策定の趣旨でございます。現在の諫早市教育大綱を定めるにあたりましては、平成２８年３月の総合教育会議におきましてご協議いただき、同じ時期に策定された「第２次諫早市総合計画」と齟齬があってはいけないということから、この総合計画を踏まえて策定したものでございます。次に２教育大綱につきまして、資料２をご覧ください。裏面が先ほどの諫早市総合計画の全体の施策の体系図でございます。この中の★印がついている７項目、基本目標の「輝くひとづくり」の基本政策「健やかなひとづくり」「こころ豊かなひとづくり」のうちの７項目を抜粋して、資料の表面の大綱の取組として推進することとしております。１番目に「学びと夢を育てる学校教育の充実」、２番目に「地域で支える青少年の健全育成」、３番目に「スポーツ・レクリエーションの振興」、４番目に「芸術・文化活動の推進」、５番目に「歴史と文化の継承・発展」、６番目に「世代を超えて学ぶ生涯学習」、７番目に「恒久平和の推進と人権意識の醸成」、この７つの取組をそれぞれ現状と課題、今後の取組方針につきまして、２ページから５ページまでに詳細は掲載しております。次に、３教育大綱の期間でございます。現在の教育大綱の期間につきましては、平成２７年度から平成３０年度までの４年間としております。以上が現在の教育大綱でございます。

今回ご協議いただきたい教育大綱の改正点でございますが、まず、１教育大綱策定の趣旨及び２教育大綱の７つの取組につきましては、現在の第２次諫早市総合計画の計画期間が、平成２８年度から平成３７年度までの１０年間であ

ることから、同じでございますので修正せず、現行のとおりと考えております。次に、３教育大綱の期間でございます。現在の大綱の計画期間が、平成３０年度、今年度末までの４年間となっておりますので、次期計画期間も４年間とし、平成３１年度（２０１９年度）から平成３４年度（２０２２年度）までの４年間と考えております。２ページから５ページの取組につきましては、説明は省略させていただきます。以上で諫早市教育大綱についての改正についての説明を終わらせていただきます。

○　教育長

はい、ありがとうございました。教育大綱策定の趣旨と前回これを定めるにあたって諫早市総合計画との関係というところで説明をしてもらいました。この期間が平成３０年度までの４年間となっていることから、総合計画に則ってそのまま更新することでどうでしょうか、そのようにしたいとのことでございますけれども、何かこのことについて、感想なり何かございますでしょうか。

○　教育長

よろしいでしょうか。では、この諫早市教育大綱につきましては、次年度から４年間このままで行くと、諫早市総合計画と齟齬がないようにということで、このままで行くということでご了解いただきたいと思います。

では、続きまして意見交換ということで自由な意見交換ができるようにしていきたいと思っております。「ふるさと学習について」という表題でございます。ふるさと学習については、２つの側面があるということで、そちらの表紙にも書いていますが、従来の学習としては「諫早を理解する学習」ということで、郷土の自然、文化、歴史、産業、コミュニティ、行政的な部分と、子ども達に愛着を持ってもらうといった部分を重視していましたが、昨今の現状を鑑みたときに、「児童生徒が、諫早の仕事に将来の仕事として興味を持つ学習」なしでは成り立たないのではないだろうかといったことで、これからのふるさと学習の在り方について、自由に意見交換ができればと思っております。現在、ふるさと学習について、どのように進められているのかといったこと、現在、諫早市教育委員会としてはどのような取組をしているかといったことを含めて学校教育課長から説明をお願いします。

○　学校教育課長

資料を１枚めくっていただいて、右側１ページでございます。「ふるさと教育」

の取組について、まず、１点目、長崎県教育委員会の取組について、県下全域で進められていることからご説明いたします。

まず、長崎県の現状と課題を四角に囲んでおりますが、本県最大の課題は人口減少であるということ、特に２点目に書いてございますが、２０６０年には７８万人に減少する見込みであると、これまでの倍のスピードで人口が減っていくと。ということは、学校教育、特に子ども達には、従来からのふるさとへの「愛着・誇り」の育成に加えて、将来の長崎県を担う人材の育成が急務であるということが求められているという実態でございます。その下をご覧ください。横軸は、小・中・高と成長の過程を入れております。縦軸は、これまでの取組とこれから重点的に取り組んでいくことを挙げております。特にこれまでの取組でございますが、先ほど教育長も申し上げましたとおり、特に、小学校、中学校においては、色々な体験学習、総合的な学習の時間を利用しまして、ふるさとへの愛着・誇りの育成を中心に取り組んできたところでございます。そしてまた特に、小学校の高学年から中学校、高校にかけては、地域課題の解決力の育成ということで、地域を知り、よさに気づき、当事者意識をもつということを大事に進めてきているところでございます。そしてこれからの取組を活かしまして、特に「住みたい、住み続けたい、訪れてみたい、もどってきたい」地域づくり、そして、人口減少の抑制、地域の活性化につながればということで、教育もその施策の一端を担っているところでございます。

１枚めくっていただいて、右側３ページでございます。次に諫早市教育委員会の取組ということでご紹介いたします。大きくは３つの事業を中心に展開しております。（１）でございますが、地域学習支援事業でございます。①です。郷土愛育成事業ということで、小中学校の総合的な学習の時間を中心に地域の特産・教育的・人的資源を活かした様々な体験活動に取り組んでおります。１枚めくっていただいて、４ページ、５ページが、現在、幼稚園、小学校、中学校で取り組んでいる郷土愛育成事業の内容です。特に、有喜地区の漁業、多良見地区のみかん、それから小長井地区の牡蠣など、地域の特徴に応じた体験活動が仕組まれているというところが現状でございます。また３ページに戻っていただきまして、②になりますが、職場体験活動事業ということで、中学校２年生を対象に市内全中学校で原則３日間の職場体験学習を実施しているところでございます。次に（２）ふるさと愛育成事業でございます。こちらは中学校１年生を対象に、白木峰の少年自然の家での宿泊体験学習を通して、ふるさと諫早を支える人達に学び、考えること、人づくりの推進を目的に進めているところです。２枚めくっていただいて、６ページでございます。これが今年度の

事業の一覧でございます。特に講師の方を見ていただいたらおわかりになるかと思いますが、それぞれの地域でご活躍いただいている方々を実際にお招きして、具体的にお話をお伺いし、そして地域を知り、そしてまた地域の課題を知り、そしてこのように熱心に取り組んでおられる方々もいるということを理解することを中心に進めている事業でございます。

それではまた３ページに戻っていただきまして、最後（３）です。教科等研究指定校事業です。特にその中でもキャリア教育の分野で、今年度西諫早中学校がキャリア教育について、九州、県、市を兼ねた研究発表会を実施したところでございます。別冊の資料がございます。「第５５回全九州中学校進路指導・キャリア教育研究大会長崎大会」、これが西諫早中学校の資料でございます。先ほど少し申し上げましたが、地域課題の解決力の育成ということを含めた研究の取組でございます。冊子の中を４枚めくっていただいて、６ページ、７ページをご覧ください。左側６ページでございます。まず研究の内容、スタートとしまして、キャリア教育の視点の明示ということで、ここの四角の中にございます「ふるさと諫早が求める人材」というのは一体どんな人材なのかということを職種別に子ども達と共に学習を深めるということをしております。そして、右側の表でございますが、普段子ども達が学習していることと、社会とのつながり、この授業、この活動が社会とどのようにつながっているのかというのを具体的に示したのが、この表２でございます。そういうことで、キャリア教育の視点から学校生活、それから授業、教育活動を見直すことをスタートとしております。１枚めくっていただいて、８ページでございます。そこを踏まえまして、では、このキャリア教育において自分はどのようなことを今後やっていったらいいのかという目標作りをしております。８、９ページには大谷翔平選手が使った目標達成表というのを参考に自分達はいかにふるさとにチャレンジしていくか、そして自分の将来の夢、目標をいかに持っていくかということをここで具体的に持たせております。そして１年間、キャリア教育の中での取組を通して、最後でございますが、１０ページ、各学年の取組を総合的な学習の時間で発表する活動を入れております。特に３年生では「未来を語ろう」というテーマで発表会を行っております。特にこの右下の写真がそうでございますが、それぞれ自分が将来いかに諫早に働きかけていくかということを中学生が提案して、そして、市役所の職員の商工観光課の課長、地域づくり推進課の課長にも協力をお願いして、子ども達の発表を講評していただいて、いかに今こう町づくりを進めているかということについて具体的にお話をいただく機会も設けております。このような視点からキャリア教育を進めているところでござ

います。駆け足でございましたが、以上が本市のふるさと教育の取組でございます。

○　教育長

はい、ありがとうございました。従来の学習の副読本もございますけれども、諫早を理解し愛するという部分と、市で行ってきた体験学習の中でより愛着を体験できる、見つけていくようにしてきましたが、将来の仕事として、児童生徒が諫早の仕事に興味を持つ、そのためには現在の産業がどうなるのか、今からこの町がどのように進んでいくのかといったことも含めて学習すべきではないのかと考えていた時に、従来のふるさと学習とこのキャリア教育を少し結び付けて考えないといけないのかなと流れとしてきているところです。県もこれを進めていますが、県が進めるから進めようと思ってきたのではなくて、諫早市の課題と思って考えているところに、県がそのような方針を出してきていると捉えております。今までの取組、そして諫早の現状、こういったことを考えたときに公立の小中学校での教育の在り方ということについて、感想なり何か出していただければと思います。いかがでしょうか。

○　大石委員

先日市長にもお越しいただいた、商工会議所の会員大会の時の話でも、商工業が置かれている今の環境の云々というのはあったんですが、話のほとんどが、やはり働き手がいない、人口減少にプラスして就業人口の流出というのが出てきております。そういった折にこうした形で教育現場の方から郷土愛に目を向けて、そしてなるべく地元に残ってもらって地元の企業で働いていただこうという趣旨というのは非常に商工業者としても有り難いし、私達もそれに甘えているだけではなく、業界として２人３脚で、教育委員会の動きと共になんらかのアクションを起こしていかなければいけないのかなと思っております。今インターンシップでも、受け入れて仕事を体験してもらっているところですが、諫早の企業として業界の良さというのもトータルでまず生徒さん達に理解をしてもらったうえで、職場体験をしてもらうという形というようなものも含めて、今後業界で取り組むことは多いのかなと思います。この取組に関しては深く感謝をいたしております。

○　教育長

色々な企業に職場体験に出掛けるのですが、ただの体験で終わっている部分

があるのかもしれません。業界の仕事の魅力やそれ関連の仕事がどれぐらいあるのかなども関連付けて体験できればいいですね。

○　大石委員

仕事が一番少ない時間帯の昼間に来られるので、場面を与えられないのもあり、若干簡単な仕事をしてもらうということがあります。私のところで言うと、興味を持ってホテルに来てもらったのに、逆に失望して帰してしまうという事例があるのではないかという危惧をしています。インターンシップについて、教育委員会と共に業界で先ほども言いましたように両輪で考えていく必要が今後あるのではないかと思います。

○　宮本委員

そのことに関していいでしょうか。うちにもインターンシップで毎年中学生を受け入れているのですが、医学的な知識もほとんどない、もちろん免許も何も持っていないわけですから、何もさせることができません。でも、患者さんに話をして、今日は中学生が来てるから一緒にいて見たり聞いたりしていいですかと尋ねると、ほとんど全ての患者さんがいいですよと言ってくれます。その後患者さんが途切れた時などに、もし次にお腹が痛いという患者さんが来たらどうしますか、ということを逆にこちら側から色々聞いてみる。そういう時には物事を色々考えたり、自分の思っていることなどを話すとよく興味を持って「よかった」など感想文を書いてくれます。来てただ体験してもらうだけではなく、来てもらった方が自分達から逆に何を伝えたいのか、何をわかって欲しいのかということを積極的にアピールするということも、してもらっても結構ですよということを教育委員会から出していただければと思います。例えば、厨房に行ってキャベツを千切りする時に、プロだったらシャーっとうまくやります。そしたらどれくらいかかったらこのくらいできるようになると思うとなれば、子ども達も考え、色々なことがそこから派生していく。そういう興味を持たせるということがうまくいく。看護学校のことを少し話していいですか。

○　教育長

はい、どうぞ。

○　宮本委員

私は、諫早市にある県央看護学校で、今も教えているのですが、そこで何を

一番言いたいかというと、諫早市にも１４万弱の人口がいますので、色々な病気をして色々な人達がいる。そして若い人達が必ず面倒を見ていかないとこの町は潰れてしまうよと、だからあなた達は看護師としてそういう人達を支えていく立場にあるんだと、そのために我々はこうして教えに来てるんですよといったことを話して、それから医療のことをする。そうするとアピールする人が目の前でアピールしてくれると、子ども達によく通じると思います。ただ単に紙で見たり、なにかのテレビコマーシャルなどで、諫早をこうしましょうああしましょうというのより。ですから、ある立場に立った人達が実際に目の前でそういうことをアピールしていく、そういう考えが全ての人に必要ではないかと思います。学校の先生方がただ単に諫早の歴史はこうですよ、はいこれ覚えてきなさい、これは試験に出ます、ではなく、こんな気持ちでしてたらしいとか、子どもの時には自分はこう思っていたけどこの年齢で考えも変わってきたと、色々な立場があって色々なことが言えると思うのです。どれだけを子どもの気持ちにすっと入り込んでいける、アピールができるかというところが私は大事ではないかと思います。

○　教育長

職場体験に行けば、目の前で見れますが、アピールを受けれるというわけではないのかもしれませんね。学校の授業の中でも通り一辺倒の先生の指導で本当にアピールになるかということなんですよね。その道で頑張っている人のやり甲斐とか気概というのがどんどん伝わってくるといいんでしょうね。たくさんの分野がありますからね。子ども達とどこでどう出会わせるかというのもありますが。

○　宮本委員

小さな子どもの頃の出会いが印象的で印象深いほど、そのことは子どもの中にすっと入ってきて、よし、あれをやってやろうと思う気持ちは強いですよね。

○　教育長

小さい時とおっしゃいましたが、結局中学校の職場体験から話がきてた、インターンシップとかからきてましたが、中学校に限らずですね。小学生も含めて。

○　宮本委員
そうですね。

○　教育長
出産する女性の人口推移でその市はなくなるのではないかと諫早も言われていますけれども、私達も教育の立場でも学校がどんどんどんどん小さくなっていくというのは、とてもではありませんが教育的にも困ることですし、子ども達のふるさとが無くなっていく、しぼんでいくというのはとても悲しいことですので、やはりできるだけ子ども達が諫早を愛し、諫早市の将来に向けて、僕はこんなことをやってみたいという気持ちを育てたいという気持ちはありますよね。今までの愛する学習が間違っていたとは思わないですけれども、そこを土台にして次のステップで、諫早のためにというのを育てていかないといけないという思いがあると思いますが、この流れとして方向性はいいですか。

○　全員
はい、いいです。いいと思います。

○　教育長
そうなると、教師がアピールできるかという問題点があるわけですよね。教師が授業をしますので、教師自身がどれだけのことを理解しているかや、どれだけの情報を持っているか、どれだけの熱意を持った人と出会っているか、といったことも問題になってくるのかなと思います。

○　宮本委員
ちょっといいですか。そのことで私いつも思うのですが、自分の人生の中で非常に印象深い先生が何人かいらっしゃるんですけれども、数からいうと僅かなんですよね。皆様方もそうと思うのですが、脱線話の方が非常に印象深くて、あの先生はこんなことを話していたというのを覚えてると思うんですよ。そのような余裕というか、学校の先生方にもそのようにして、子ども達にとってもそういうのが本当の教師としての教えるという立場が少しあるのではないかというようなことを時々感じることがあります。

○　教育長
教師の考え方、ものの見方でどうにかしていくというよりも、教師自身がも

っと諫早を知り、諫早の未来に希望が持てるようにしていかないと伝わらないんでしょうね。教師だけでいいのかなという気もしていますが。

○　緒方委員

先ほど、就業人口が減ってきており、機械に取って替わる仕事がどんどん増えていくということで、機械化の流れというのはおそらく止まらないと思います。教育の現場ではまず生活をしていく、食べていくということが基本にあって、そのうえで自己実現だとか社会貢献だとか、そういうことが勤労意欲にもつながっていくでしょうし、豊かな人生を送っていくことにつながっていくと思います。今ある職業を紹介したり、その役割を紹介していくということは、地域に愛着を持ち、色々な仕事を大切にするということで重要だと思うのですが、これからどういう仕事が必要になるのか、どういう職業が現れてくるのか、ということは先生達も多分わからないと思うのですが、それを一緒に考えていくという教育の在り方も必要だと思います。工業団地が今新たにできますが、そこでどういう仕事が必要になってくるのかということを見学なり、話を聞くなりして、仕事観とか職業観の未来像みたいなものをその現場で学習するということもこれから必要になってくると思います。

○　教育長

今のお話で２つあるなと思ったのは、最初私が申し上げた時に、これからの諫早はどんな町になっていくのだろうと、まさしくその工業団地もまた新しくできる、今でもどのくらいの生産量かというのも、どんな工場があるのかわからないのですが、今度はどの様なものができていくんだろうと、ひとつは、これからの諫早の町の有り様といいますか、このようになろうとしていくことも知らないといけない、もうひとつは、これからの時代の中で、どういう仕事観、職業観を持たせてあげるか。現場に行けとおっしゃいましたね。

○　緒方委員

そうですね。新しい仕事なり職場なりを作ってらっしゃる人が諫早にもいらっしゃるでしょうから、そういう方達が、これからの人材に期待すること、ビジョンみたいなものを話してもらうということも、必要だと思います。今までの伝統的な産業、職業を継承してもらうということももちろん必要なのですが、都会に行かなくても諫早でもこんなことができるんだ、自分でそれを開拓していけるんだ、という意味でのふるさと志向が育成されればいいなと思います。

○　教育長

そうなんですよね。長崎県の方針だけ見ていると、企業家を育てるというのもあります。

○　緒方委員

色々情報やコツなどは、どんどん身近に近付いてきますからあえて大都市に行かなくてもできる仕事というのはたくさんこれから増えていくと思います。インターネットにしても交通インフラにしても。

○　秀島委員

今お話に出ていたことは、そういう職業に就くために、では子ども達一人一人がどういう力を身に付けないといけないのか、これからどういう力を身に付けて行くことが自分の夢とかを実現するために必要なのかということ。先ほど西諫早中学校のキャリア教育のご紹介があったのですが、研究発表の方は私も拝見させていただいたんですけれども、ひとつの総合的な学習だけの部分でキャリア教育を進めているのではなくて、様々な活動とか授業とかをすべてを絡めながら、子ども達を育てていく、育んでいくということが、一貫して取り組まれているところは、すごく共感する部分が大きかったので、これは全市的に他の学校でもこういった形で進めていくことで、その中でふるさとが求める人材とかというものの紹介も研究の中でありましたけれども、実際に自分自身が今学んでいることが、社会に出た時にどういうことに結び付いていくのかということを実感できることにもつながるのかなというので、これは本当に進めていっていただきたい授業だと思いました。

○　教育長

西中の取組というのは、私もかなり心動かされた取組で、職場体験は職場体験だけとか、これはこれだけという主義ではなくて、全体の授業の中、普通の学校生活の中でどの場面が将来の自分の仕事にどう響いていくかという意識を持たせていくというのはとても素晴らしい。

○　秀島委員

挨拶ひとつとっても、社会に出たときのことに結び付いていくということにつなげていって、それでひとつひとつ自分自身の達成感を得られるものがあれば、自己肯定感を高めていくことにもつながっていくのかなと思います。

○　教育長
　ホテルで求められるのは笑顔って書いてありますね、一番最初に。

○　大石委員
　はい。

○　教育長
　西諫早中学校の授業の中で、どれだけの諫早の様々な仕事の人達のことや、将来像などを持ってやっていくか、だいぶ違ってきますよね。今色々言っていただいたんですが、例えば、新しい工業団地ができようとしているとか、どんなのができようとしているのか、そこでどんなビジョンを持ってやっているのかなどを、このいいシステムの中に取り込んでいかないといけないだろうと思うんですよね。色々なところと連携しないといけないんだろうという思いはあるんですけれども。色々なところというのもまた漠然としてるんですけれども。

○　秀島委員
　そうなると、市のなかでも特性というか地域性が絡んできてその地域の中では、というのが出てくるのかもしれないのですね。

○　大石委員
　今のインターンシップ、職業体験自体も、形態を少し考え直すべきところはあると思います。先ほど言いましたけれども、対応しきれないというところがあるんですよ。例えば、諫中が来たら、次、西中、次、どこ中と連続で日にちもずっと重なり合って、結局企業は対応しきれないで簡単な所に仕事を押し付けてしまうというところがあります。全てを一斉にとなると中学校の方も難しいし企業も難しいでしょうけれど、例えば、２グループか３グループに時期を分けて、数校が一緒に来てくれるということをしていただいたら、ある程度企業としても対応ができるし、業界としても、例えば３日間のうちの１日目は業界の方で職業としてのレクチャーをして、そして、２日目、３日目に現場に送り出すというようなことができるのかなという気がします。先ほども連携と言われましたけれども、ぜひそこは各企業、会議所を中心として、企業としてやっていただきたいと思うのは、先生達は、子ども達との接触もありますけれども、私、企業の方としては、ないのは子ども達との接触の時間と場所なんです。だから、先生達には、地方・ふるさとで働く意義とかそういったものを教えて

こちらへ送り出していただいて、今度私達が業界で働ける業界の意義、仕事としての意義というのを子ども達に教えるという、仕事の職務分掌を知り仕掛けていけば今以上のインターンシップの意義が深まっていくのかなという気がします。

○　教育長

学校に来ていただいて、ゲストティーチャーみたいにして教えていただくということがありますが、そうではなくて、先生達はそこまで仕組むけれども、その職業の魅力とか意義とかいったことは、そこの人達、そこの職業の人達、企業の人達が請け負ってした方がいいということですね。

○　大石委員

そうですね。先生自体がほとんど他の仕事をした経験がありません。

○　教育長

そうなんですよ、そこなんですよ。そこのハードルをどうするかなんですよ。

○　大石委員

それはもう任せる、任せていいのかなと。

○　教育長

忙しいと聞いて、これくらいさせとこうかくらい、それぐらいで終わってしまうこともありますもんね。

○　大石委員

必ず生徒さんから感想文が届くのですが、それに目を通す時に、ほとんど一緒なんですよ、苦情がないんですよね。それを見る度に逆にこっちとしても思い描いていたインターンシップの経験をさせてあげられなかったという悔いが残って、常に社内とか、僕らの業界の組合の中で、どうにか取り組めないかなという話はしてるんですよね。

○　教育長

そうなんですね。そのあたり整理して、中学校側とも相談して、もう一度職場体験の在り方で、受け入れる側もやり甲斐があるような形で、少し調整をし

ないといけないところがあるかもしれません。

○　宮本委員

看護学校でやっているのが、各病院に実習といって１週間とか２週間とかずっと行くわけです。朝からとか昼からとか、午前中とか。その間にでは何をしに行くかと。黙っていたら、ただ看護師さん達がするのを見てついて回るだけなんです。それからあとレポートを出させられる。それだけではだめだと。何を一番見なければいけないかというのを指導しなければいけないんです。私がひとつ言っていたのが、自分はああいう看護師さんになりたいなという人を探しなさいと。もうひとつは、ああいう看護師さんには絶対なりたくないなというのも見なさいと。それで、その２つでどこが違うか、自分は今どこまでできているのか、どうやっていけばそれができるのか。できればあなたが勇気を持ってるならば、なりたいなと思う人と直接色々話をしてもらうと。そういうことを言うとですね、やっぱり人気がある所は、「あの人良か、あの人良か」という所には就職して行くんです。人気がない所にはいくら給与これだけあるよと言ってもなかなか行きません。

○　教育長

やはり、それぞれの職場、もちろんなってみたいという仕事であってもなくてもいいんですけれども、働いている人、そこで生きている人に魅力を感じたら自分もって思ってみたりするんでしょうね。だから、できるだけ自分の職場に思いを持っている人と出会わせる、それが一番いいのですが、どうやったらたくさん会えるんだろうと思うわけですが、それでも出会ってても聞けるタイミングがなければいけない、だからさっきおっしゃったように棲み分けっていうのは必要になるんでしょうね。宮本先生がいる時はいいですが、いない時はどういうアドバイスが必要なのかということになるから、そこはある程度整理しないといけないんでしょうね。

○　宮本委員

それも、学校側、行く方から、こういう風な指導をできればお願いしますと、お願いできるような関係になれば、更に良くなっていくでしょうね。

○　教育長

西中の場合には、市役所からも課長に来てもらってパネルディスカッション

をやっていますが、各種産業の色々な情報を行政は持っているわけです。そういったところも少し連携があってもいいのかなという気がしているわけですけれども。具体的にはどうやって行くのかというのはまだまだ先の話ですが。商工会とか色々なところがきっといるんだと思うんですけれども。市長、今までの話の中でいかがでしょうか。

○　市長

全く違う話ですが、なんのために学習をするのかというのが、当時僕らが小学校時代というのはこういう職場体験、インターンシップとかはなかったんですよね。例えば、英語の時間になんのために英語を勉強しないといけないのかと、当時はまだ日本は貧乏で外国に行くのは考えられなかったですから、国際化がこれほど進むというのは考えられなかったですから。英語はなんのために勉強するのかな、数学はなんのために勉強するのかな、足し算引き算ができればいいんじゃないかなと。そういう意味でそれぞれの子ども達が、例えば、ホテルに興味がある、看護師さんに興味がある、美容師さんに興味があるとかいったならば、そこに行き着くためにはどういう学習をしないといけないとか、どういう経験をしないといけないとか、というのを教えるというか、サポートをする、という風なことが大事なのかなと。

それからもうひとつ、よく僕は成人の日の時に、成人式は諫早で、小長井と飯盛では成人の集いというのをしています。その時に成人になった子ども達が、中学校はみんな同じなので非常に和気藹々とした中で、一人ひとりが意見発表をするんですね。自分の思いとか将来これになりたいとか。もう既に結婚している子もいるし、子どももいるという子もいたりしますし。最近感じるのが、５、６年前とは違って、介護士になりたい、介護の職場で働きたいという子はほとんどいないんですよ。看護師さんはいます。美容師さんはいます。一番多いのはケーキ屋さんですけれども。女性だとそういう風な形になってくるんですが、介護の職場で働きたいという子はほとんどいなくなった。私が勝手に思っているのは、マスコミが非常に悲惨な職場みたいな印象を与えるような報道の仕方をするから、そうなったんじゃないかなと。私が市長に就任してから１０年になるんですが、その１０年前は、必ず小長井の５、６０人の中には数人いらっしゃいましたよ、そういう介護の職場で働きたいという方が。いらっしゃったんですけれども、それは飯盛でもそうでした。それが今ほとんど聞かない。というのは、これは教育のせいというわけではなくて、殺人事件が起こった、虐待したですとか、そういう報道の仕方が影響してるのかなと私自身は感

じるんですけれども。だから、介護職場のマンパワーの不足というのは、今もそうなんですけれども、ますます乖離がひどくなっていくのかなと。

ですから、やっぱりその辺の教育もしないといけないのではないかなと。介護の意味合いとか、なんのために介護が必要なのかというのを、やっぱり教えてあげないといけないのではないかなという気がしてますけれども。報道などで一面だけを見てしまうということがあるのかなというような気がしますね。

○　緒方委員

都会に行く子は、具体的に都会で何かやりたいって人もいるでしょうけど、ほとんどが、都会というものへの憧れだと思うんですよね。だから、郷土に残って仕事をするという意味や、都会への憧れに勝るようなものを作ってあげれば、少しでも流出は防げるかなと思います。

○　市長

今の人口統計でいくと、昔も高校を卒業すると集団就職があったみたいに、大学とか就職していく人がほとんどだったんですね。今よりももっと仕事がなかったですから、地元には。でもそのうちに帰ってきてたんですよ。その帰ってきてる分が今少なくなっているんです。そこが問題なんですよ。仕事がないかというとあるんですけれども、やっぱりその仕事の紹介の仕方が悪いのかどうかわからないのですが、建設業とかサービス業とかの方がやっぱり非常に苦戦している。製造業は比較的、製造業といっても色々ありますけれど。

○　教育長

進学などでは、その子達が、戻ってあんな仕事がある、こんな仕事があると仕事が頭に浮かばないんですよね。教え子達と会ってもそうなんですけど。だって諫早に仕事がなかとやもんと言いますもんね。その辺は、企業の努力もあるんだろうけど、進路指導という学校の教育の在り方もどうなのかなと、ずっと僕の頭の中にあったんですよね。

○　市長

一発で仕事が田舎にはないと言われたら。ところが諫早の有効求人倍率は全国平均ですから、長崎県では一番高いです。だから全国平均くらいで一番高いんですよ、長崎県では。それだけ全体が低いということなんですよ。でも、それをわかってる人というのはほとんどいらっしゃらないですよね。田舎には仕

事がない、自分の好みの仕事がないと、多分全体的にそういう言葉がつくんでしょうけど。

○　教育長

親も言いますもんね。帰ってこんとね、いやこっち仕事なかけんって親が言いますもんね。いや、あるでしょうって言うんですけど。

○　緒方委員

新しい工業団地の就業者数はどれくらいになるかわかりますか。

○　市長

１，５００人くらいです。ただそういう風になるかどうかはわかりません。職種によって全く違いますから。労働力をたくさん必要とするような産業がくるか。１，５００人というのは、中核工業団地の面積と従業員数から割り出した数値です。新しい工業団地は２０ヘクタールくらいですから、その２０ヘクタールの面積で計算すると１，５００人くらいかなと。ただし、もっと労働力を使う企業もあるでしょうし、使わない企業もあるだろうし、実際はちょっとまだ正式にはわかりません。どういう企業を誘致できるかで。誘致はできると思うのですが、裾野の広い産業といいますか、幅の広くできるような産業を誘致したいと思ってますけれども。長崎県の中では企業誘致ができているのはあんまりないです。西諫早産業団地は１０ヘクタールちょっとあるんですけど、実質は３年で販売できました。３年半なんですけど、企業誘致しだしてからは３年です。販売が完了するというのは、もう少し時間がかかるだろうと思っていたのが完了したというのはそれだけ立地条件がいいってことでしょうから。

○　緒方委員

本社がどこかよそにあって、そこを工場とか支店とかするとかあるんでしょうけど。自分達が会社を興して工場を興してという、メイドインイサハヤみたいな、そういう野心というか、夢を持った子どもが育ってくれたらいいなと思います。あそこに店舗を構えるんだとか、工場を作るんだみたいな。

○　市長

ほとんどは出先でしょうね。諫早は販売店とかが集まってくるのは、交通の体系がいいからでしょうね。長崎とか島原とかにある営業所を統合して、諫早

に作るというのがあるんですよ。

○　教育長

　時間がきました。今日の意見を参考にさせていただきながら、また委員さん達と相談しながら、まずはインターンシップの在り方をはじめとして、ふるさと学習の在り方については、もう少し進めていきたいという風に思いますので、今後ともよろしくお願いします。